

戦争を知らない世代へ ⑬ 広島編

私が聞いたヒロシマ

—高校生が訴える平和への叫び—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ⑬ 広島編

私が聞いたヒロシマ

—高校生が訴える平和への叫び—

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑬

私が聞いたヒロシマ——高校生が訴える平和への叫び

昭和50年8月6日 初版第1刷発行

編 者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

印刷所 凸版印刷株式会社

発刊に寄せて

人類史上初の恐るべき原爆が広島市の上空で炸裂してから三十年が経過した。一瞬にして幾十万の同胞を失ったこの事実は、単に日本人のいまわしい思い出としてではなく、平和を望む全人類の貴重な経験としていかなければならない。

「広島」「長崎」以後、幸いにして核兵器は使用されていないが、米ソを初めとする核大国の核保有量はすでに人類を何十回にもわたって抹殺できる段階にまで達している。もし今後、核兵器が使用されることにでもなれば、その悲劇は我々日本人の経験の比ではないことは明白といえる。

このような現状が横たわっているにもかかわらず、時の経過とともに被爆者の原体験の風化が進み、さらに恐しいことに社会のなかに戦争肯定の風潮が若い世代をむしばみ始めている傾向が見えている。確実に次代の日本、世界を担う立場にいるこの世代が、もし戦争、なかんずく原水爆の悲惨さ、残酷さを理解できなくなれば、地球の未来はいったいどうなるのだろうか。この切実な事実を前にして、生命の尊重に至高の価値を置いた絶対平和主義を掲げて、我々創価学会青年部は「核兵器の徹廃および戦争の絶滅」に向けて立ち上がった。その平和運動の一環として、すでに戦争体験シリーズ「戦争を知らない世代へ」を着々と刊行している。

このような時に、広島県高等部の有志の手によって被爆体験者の声を聞く運動が進められていることを聞いた。世界初の被爆都市に住む高等部員達の、全く自発の意思による運動の展開であった。未来社会に対する彼等の並々ならぬ責任感をこの一事からも知ることができる。数ヵ月前、彼等は「生命の叫び」と題する文集を完成した。これには彼等が直接被爆体験者にインタビューを試み、心に焼きつけた原体験、および主張、原爆に関する資料等が収録された。今回創価学会青年部反戦出版委員会は彼等のこの誠意の結晶をぜひとも同世代の若人たちに読んでいただく必要があるとして、体裁を整えて戦争体験シリーズの一冊として加えることになった。こうして本になることはすばらしいことである。だが、何よりも喜ばしいのは、高校生自身の手によって平和運動が進められたことであり、また、この取材活動を通して彼等自身が、生命に被爆者の真実の叫びを刻みつけることができたことではないだろうか。戦争を知らない世代にとって、これほど貴重な体験はないと思うからである。広島県高等部の諸君の先駆が、日本、そして世界の同世代の人々に大きな波動を与えることを祈ってやまない。

昭和五十年七月三日

創価学会高等部長 高橋英明

目次

発刊に寄せて

●第1章 世代から世代へ

狂気のごとき平和論……………荒木 勇司

自殺まで考えた坂口さん……………高井 智

勇気ある一人の被爆者……………渡辺 敦子

原爆に川面が煮えた……………佐々木里三

春に先立つ厳寒の日々……………田村 充子

死と化した電車……………井手 泰雄

老人の呟き……………西田己智恵

空白の日々……………西村 康博

語り継ごう、この悲惨な事実を……………野崎 正典
甲斐 哲男
木村 徹
小竹秀二郎

9 13 17 21 24 27 31 34 38

わが子すら助けられなかった戦争	字根 孝子	42
「おばさん、すみません」	飯田 和江	48
十歳の悲劇	上妻 祥子	51
被爆後の広島	角 正明	55
六百人が三人に	増川 修子	58
今なお続く原爆症	大石 博之	61
全てを変えた八月六日	松野 正信	65
被爆二世だからこそ	住野三枝子	68
死の恐怖に襲われた毎日	迫田 典子	72
何のために戦争をするのか	中川 希	75
原爆はサタンの産物	久保 裕	78
虫けらの如く奪われた生命	増本 英子	81
帰らなかった姉	山口 秀之	83
着物のようにはがれた皮膚	高木 雅雪	87
炎の広島	桜尾 淳子	90
怨恨と愛情の交錯した世界	松沢小夜子	93
父の体験と私の決意	伊藤 博	97

必死に送げた母……………	森本 和恵
広島っ子の使命……………	若林 智子
僕ら・戦後派の使命……………	梶田 和志
初めて来た広島が……………	高阪 啓子
地獄を生きてきた父……………	伊藤 孝夫
戦争をしていなければ平和なのか……………	浅原 宏
憎むべきは戦争そのもの……………	木村 徹
原爆乙女として戦い続けた叔母……………	石田久美子
八日六日のラジオを聞いて……………	前川登貴子
ぼろ衣一枚が祖父の形見だった……………	岡田ますみ
決して忘れてはならないこと……………	権田 浩
世界よ、原爆の恐さを知れノ……………	八木 繁樹
たった一発の原爆が……………	松林 功
犠牲となった母の親友……………	細川ゆかり
苦難の青春……………	埴生 栄作
健康が欲しい……………	広瀬 真澄

●第2章 平和への提言

戦争.....	齊藤 哲子
平和への意識が低下する現在.....	清水 千鶴
人類は生きねばならぬ.....	長橋 久方
「広島のことろ——二十九年」を読んで.....	板本佳鈴代
平和の輪を広げて.....	小竹秀二郎
平和公園に思う.....	長橋 智子
平和をかえせ.....	浜崎 容子
今日からは私も学び.....	磯辺八栄子
現実を直視しよう.....	吉原 一彦
爆心地——広島のかいび.....	中斐貴美子
未来に対する日本の使命.....	片庭 順子
あとがき.....	

第1章

世代から世代へ

狂気のごとき平和論

荒木 勇 司 （観音高校三年）

昭和二十年八月六日、午前八時、空にマグネシウムを燃やしたような光が走り、爆風と放射能が広島を襲った。原子爆弾の投下である。たった一発の爆弾によって、広島は焦土と化し、一瞬にして二十数万の尊い人命が奪われ、現在でもなお原爆を知らぬ二世、三世たちを、白血病によって苦しめ、また死に至らしめているのである。

その日より三十年、現在、広島は復興し当時の面影を残すものは、被爆当時の写真と平和公園の一角にある原爆ドームだけである。そして、当時、被爆された方々の大半は四十代を越え、僕達の耳に、その悲惨な体験が入ってくることは皆無になりつつある。

観光地化された平和公園を前にして、僕らは平和というものをどううけとめれば良いのか。戦時下には平和を渴望してやまなかったはずの人間が、戦争が終わり平和が訪れると、その平和に浸りきって平和の意味を忘れてしまう。僕らは原爆ドームを忘れてはいけない。原爆ドームは悲惨なもの、醜悪なものをなめつくした民衆の叫びなのではないだろうか。戦時中、平和を願った者

は、軍部でもなければ政府の高官でもなかったはずだ。その軍務に従事することを強いられた一般の名もない市民であった。

その限りある一般民衆の一人の声を、より普遍的な波動へと高めること、その地道な一人一人の活動を、確実な一歩へと展開するために、僕ら広島の人々が今立ち上がる時がきたと思う。反戦平和の旗を掲げ、この爆心地広島から着実な一歩を踏み出さねばならない。

当時、広島大学の前身である高等師範学校の教職をとっておられたM氏（現在、七十歳）は、八月五日の日記に次のように書かれている。

「八月五日、

乗船、美しき夜明け

井口労務課長と懇談、竹槍五百本作製

修道中学移動のこと所長より話あり、

なお特殊船（人間魚雷）製造命令きた

りし由話あり、手持ち時間に柔剣道の

稽古行なわれ、学徒の士気あがる。

（以下略）」

この日記は、氏はいつもつぎの日の朝に書く習慣があったため、書かれたのは原爆が投下される五分前であったという。

M氏はその日、学徒動員で働いている学生と一緒に、宮島から船で江波の造船所にやってきて、机にむかいこの日記を書いていたのである。江波は爆心地から四キロばかり離れた所にあり、被害の少ない地とされているが、それでも、この日記の持ち主であるM氏は、爆風で飛び散ったガラスにより右眼を失明されているし、また同僚のK氏は爆風による腸の内出血を起こされ三日後に亡くなられている。

M氏はその時、造船所内に直撃弾をうけたのだと思い、トラックに乗って市内に右眼の治療に出かけて行ったのである。当時は被爆した全ての人々は自分達の所だけ直撃され市内全体が一発の爆弾によって破壊されたのだとは思っていなかったのである。

市内に出たM氏は事の重大さに驚き、その悲惨さを傷をまぬがれた左眼で見た時、胸をしめつけられる思いがしたそうである。その時の光景は、今現在M氏の脳裏の奥深く刻まれ、思い出すたびに悲痛ななんともいえぬ感情が込みあげてくると語っていた。

山積みにされた死体の中には、まだ息があるのか火傷を負った黒い体をズルズルと這うように動かしていたという。このような被爆という悲惨の極地を目のあたりにしたM氏は、「人類は生きねばならぬ」という根本命題が胸の内から湧いてきたという。人類の文明がたった一発の爆弾

によって破壊されるとはいいたいということなのだ。人類は己の手で首を締めているようなものだ、とM氏は語る。

M氏も語るように、現在の世界は、核の脅威によって世界の平和を依持していくという狂気のごとき平和論が支配しているのである。しかし、誰が核のボタンを押さないと確信が持てるのか。人間であるかぎり、過去の歴史が示すように幾多の過ちを犯している姿を見て、僕達はつかの間の安穩も許されてはいない。

僕達はそういった桎梏しこくからはなれ、核兵器全廢の確実な運動を展開せねばならない。現在の反戦運動の躓つまずきを越えて、新たな民衆の声に立脚した思想を世界に浸透させねばならないと思う。

自殺まで考えた坂口さん

高井 智（城北高校三年）

昭和二十年八月六日——広島のに、地獄絵図さながらの光景を現出した原子爆弾が炸裂して今年で三十年。当時五歳だった坂口肇さんは、自身の被爆体験を言葉少なに、ぼつぼつと語ってくれた。

その当時、原爆落下の中心地から二キロあまり離れた舟入川口町（現在の舟入南町）に、母親と二人で暮らしていた。坂口さんは、いつもなら当然のこととして幼稚園へ出かけるはずが、何を思ったのか八月六日のこの日は、休んでしまい近所へ遊びに出たのである。「もしその日、わが家以上に爆心地に近かった幼稚園へ行っていたなら、今の私はなかっただろう」と、坂口さんは述懐する。

八時十五分、隣のおばさんに「B 29が通りよるよ」と言われ、空を見上げたその時だった。一瞬「ピカッ」と光ったと同時に、小さな体は五メートルほど吹き飛ばされていた。体中がと

ても熱く、泣きながら無我夢中でわが家へ、母のもとへ走って帰った。お母さんは、家の下敷にこそなつてはいたが、あまり大きな怪我はしていなかったそうである。しかし、坂口さんの体は見る見るうちに火ぶくれのようになってしまい、手のつけようのないほど泣き叫んだという。

それから、近くの救護所に指定された舟入小学校の講堂に担架で収容された。その時、担架が大人用であつたので、一人の男の人と一緒に乗せられたわけであるが、目は飛び出し、体中は血まみれというその男の人の姿は、今でも鮮烈な印象として残っているという。

収容されたものの講堂の中は、その男の人のような状態にある人や、さらにひどい怪我の人、そしてそこにいる人達の大部分が、裸で血まみれの無惨な姿であつた。そのうえ、ひどいことには、そこに一人の医者もいず、つけるべき薬もなかったのである。食べるものも与えられずに、多くの人々がそのまま放つて置かれたという。その光景は、まるで地獄のようであつた。

坂口さん自身、体中火ぶくれのような状態で、日が経つにつれ夏の暑さも手伝って傷口は膿み始め、悪臭を発し、蠅が体にうるさくまとわりついてならなかった。そして、それは体だけでなく頭についても同様だつた。冬瓜とうがのように柔かくなつた頭は、手で持ち上げようとすれば、指がそのままズブズブとめり込んでしまうのではないかと思われるような具合になつていた。——このような坂口さんに、お母さんは「もう、この子は助からないだろう。それならば、今できることを精一杯やってあげよう」そんな気持の毎日だつたと話しておられたそうだ。